

群 教 ゼ	E03 - 01
	平 16.220集

不登校児童を支援する指導の工夫

- 「生活ファイル」作りとその活用を通して -

特別研修員 高橋 洋子 (水上町立幸知小学校)

《研究の概要》

本研究は、不登校児童を対象に校内支援体制の充実を図り、全職員でかかわりながら教室復帰を目指した実践的研究である。具体的には、不登校児童の生活の様子や指導の過程を記録したファイルを作成し、そのファイルを通して児童の状況を捉え支援を行った。そして、ファイルを通してみとり、状況に応じた支援計画を立て、方針を検討し全職員で共通理解を図りながら、不登校児童の教室復帰に向けての支援を行った。

【キーワード：健康教育 校内支援 ファイル 不登校 養護教諭】

主題設定の理由

心の健康問題として、いじめや不登校、保健室登校などは、少年人口の減少にもかかわらず増加傾向にある¹⁾。スクールカウンセラーや心の相談員の配置などの措置がとられているが、まだまだ問題を抱える児童が多い。心の健康問題に直面した際、対処方法を身に付けていないことや耐性の欠如から、問題が深刻化してしまうケースがある。

本校は、全校児童数 40 人の小規模校である。人間関係は固定化し、子どもたちの意識の中には自然と序列が生まれてきている。こうした人間関係の中で、一部の児童は自分を表現することが苦手となり、人とのかかわりに弱さを感じている。中には、遅刻・欠席がちのため、友だちとのかかわりや学習の遅れへの不安から徐々に学級に入りにくくなり不登校となってしまった児童もみられた。また、これまでは、担任や養護教諭がそれぞれの思いや考えに基づいて個別に不登校児童にかかわっていたため、組織で支援していくことに弱さがみられた。このような実態から、生徒指導委員会で、担任から報告される児童の様子をもとに、職員全体としてどのようにかかわっていくことが望ましいかという支援方針の検討を行う必要があると考えた。

以上のことから、不登校児童の生活の様子や指導の過程を記録し、誰もが共通理解を図って支援できるよう「生活ファイル」を作成した。子どものおかれている状況を理解し、そのファイルからみとれる情報をもとに、今後どのように支援していくことが必要であるかを、共通理解を図り進めた。また、具体的には、校内支援の見直しから児童に対する支援を行っていかうと考えた。

本研究においては、不登校児童に関する情報を「生活ファイル」に整理し、その活用及び校内支援体制の充実を図ることにより、不登校児童の教室復帰が円滑になるよう支援した。

研究のねらい

不登校児童に対し、校内支援体制の充実を図りながら、「生活ファイル」を通して、状況に応じた支援を円滑にしていくことが、不登校児童が教室復帰するために効果的であることを研究を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 不登校児童の様子や指導の過程を継続的に記録し、「生活ファイル」に整理することにより、児童の状況が理解でき状況に応じた支援計画を立てることができるであろう。
- 2 生徒指導委員会で支援方針の検討をし、明確にしていくことにより、不登校児童への理解が深まり、校内支援体制が充実し、支援計画に基づいた支援ができるであろう。

研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「生活ファイル」について

「生活ファイル」とは、不登校児童の状況を把握し、支援計画を立てるための資料である。

【生活ファイルの扱う内容】

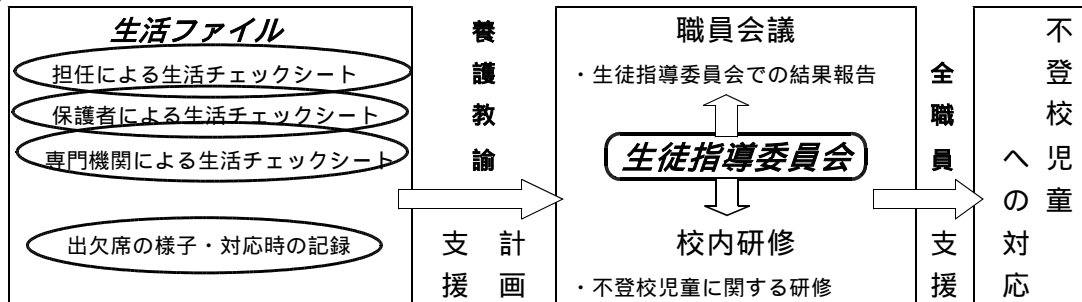
- ・学 校・・・担任は、毎日出欠席を確認。養護教諭は「不登校傾向児童の記録」に様子を記入。保護者や本人と対応した際の記録をしておく。
また、担任は一ヶ月を振り返り、「生活チェックシート」(資料1)に記入。
- ・保護者・・・児童の様子を「毎日のがんばりチェック表」に記入。また、一ヶ月を振り返り「生活チェックシート」(資料2)に記入。
- ・専門機関・・・通級または通所した際の一ヶ月を振り返り、「生活チェックシート」(資料3)に記入。

資料1 担任によるシート

資料2 保護者によるシート

資料3 専門機関によるシート

(2) 不登校児童への校内支援体制について



(3) 状況に応じた支援について

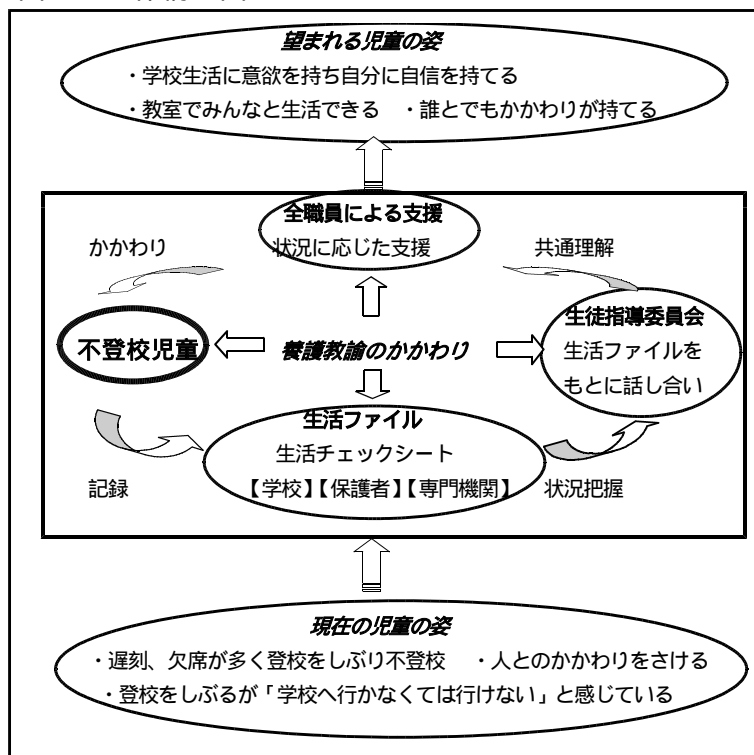
児童の状況に応じた校内支援体制充実のために、不登校児童が教室復帰するまでを大きく三期にわけ、それぞれの時期の児童の状況に応じた具体的支援を想定しておく。(下記の表)

支援期	具体的な支援方法		
	学校とかがわりができる場合		学校とのかかりができない場合
第1期 不登校	<ul style="list-style-type: none"> ・担任を中心に電話連絡や家庭訪問をし、学校とのつながりが絶えないようにしていく。 ・児童に会える場合は、一緒に遊びながら信頼関係を作り、登校を渋る原因を探っていく。 ・児童に会えない場合は、保護者と話し、家での様子を聞きながら、登校を渋る原因を保護者と考え問題の共有をしていく。 ・友だちと会うことを拒否しなければ、学級の友だちに呼びかけ一緒に遊ばせる機会を作っていく。 ・登校しやすい時間に登校を促していく。無理に登校させない。 		<ul style="list-style-type: none"> ・学校からの働きかけに一切応じない期間が長引くようであれば、生徒指導委員会で話し合い専門機関の協力を得る。 専門機関・適応指導教室 ・研究所 ・医療機関 等 どの専門機関とかがわるかは、保護者の意見を聞きながら生徒指導委員会で話し合う。
第2期 登校開始	教室に行ける場合	教室に行けない場合	学校以外に行ける場合
	<ul style="list-style-type: none"> ・休み時間など、孤立しないように担任は声をかけ、一緒に遊んだり話しをしたりしながら、安心感を与える。 ・授業に遅れを感じないように授業中は個別指導を取り入れたり、補習をしたりする。 ・他の職員は、授業やその他の活動で声をかけていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・直接、教室に行く抵抗があれば本人の希望を聞き、保健室や別室で個別指導を行い勉強への不安を取り除く。 ・最初のうちは本人に時間割を作成させ、徐々に学級の時間割を意識させていく。 ・担任の先生を中心に保健室訪問をしてもらい学級とのつながりを持っていく。 ・保健室以外の場所に行けるよう計画的に活動の場を広げて、徐々に教室へと近づけていく。 ・学級の友だちとかがわるチャンスを作り、かわらせる。 ・一日のうち何時間が教室で過ごせるようになったら、教室復帰をさせていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・専門機関と保護者と連携を図り、登校できるチャンスを作っていく。 (学校行事や学級の活動を通して)
第3期 教室復帰	<ul style="list-style-type: none"> ・教室で生活する様子を継続観察しながら、励ましたり認めたりし、自信を持たせる。 ・学校と家庭で連絡を取りながら、継続支援し自立を見守る。 		

不登校児童への具体的支援を行っていくために、次の手順を踏んでいく。まず学校・家庭・専門機関で記録された「生活チェックシート」や毎日の記録から児童の状況を把握することに努める。上記の表を基礎とし、これと照らし合わせながら具体的な支援計画を考えていく。次に、計画したものを生徒指導委員会で検討し、誰がどのようにかかわっていくのかを明確にしていく。そして生徒指導委員会で検討された内容を全職員で確認・共通理解し対応していく。また、一ヶ月経過したら児童の様子を振り返り、同様に生徒指導委員会で検討・確認していく。

(4) 全体構想図(図1)

図1 全体構想図



2 実践の概要及び結果と考察

不登校児童であるA男は、小学3年生である。2年生時も遅刻・欠席が多かったが長期化することはなかった。しかし、3年生への進級と同時に不登校傾向となり欠席が長引いたため、生徒指導委員会で具体的な対応をしていくこととなった。担任と養護教諭が連絡を取りながら、家庭訪問を繰り返すことにより、放課後登校から保健室登校へと進んだが、教室復帰はできず7月より再度、不登校となってしまった。生徒指導委員会での話し合いの結果、専門機関とかわりながら指導・支援していくことが望ましいと考えた。そして、保護者とA男の希望から市の研究所へ通所することとなった。そこで、学校としては校内支援を充実させ、教室復帰を目指し学校・家庭・専門機関と連携を図り児童の状況に応じた支援を行った。

生活ファイルの記述内容や生徒指導委員会で話し合われた内容、不登校児童の支援に当たっている職員の意識調査や言動から分析を行う。

(1) 児童の状況を理解し、状況に応じた支援計画を立てることができたか(見通し1)

ア 実践の概要

不登校児童の生活の様子や指導の過程を記録した「生活ファイル」を作成し、そのファイルを通して児童の状況を捉えていく。そして、児童の状況に応じた支援方法を立案していく。

イ 結果と考察

一ヶ月の生活を振り返り、担任・保護者・専門機関それぞれの立場から児童にかかわった様子を、「生活チェックシート」に記入してもらった(資料4)。そして、それらを「生活ファイル」としてまとめ、記述内容を整理していくと、何が共通の課題であるのかを捉えることができた。これをもとに不登校児童に対して学校全体でどうかかわればいいのかという具体的な支援計画を考え、生徒指導委員会に提案していくことができた。

資料4 9月のチェックシート(担任)

(以下は9月の様子を振り返っての10月に向けての支援)

【生活ファイル】 担任・保護者・専門機関による「生活チェックシート」
養護教諭による毎日の記録「不登校傾向児童の記録」

【課題】 担任による週一回の家庭訪問 旅行への参加 再登校の方法

【生徒指導委員会への具体的な支援方法の提案資料】

定期的な家庭訪問の実施について

- 担任とのつながりを形成していく時期にある。担任による定期的な家庭訪問の実施を行っていく。

旅行への参加について

- A男の「旅行に行きたい」という気持ちをチャンスとして生かす。「旅行に行きたい」という気持ちはあるが、不安な気持ちも持っている。不安の解消に努めるが、A男に決定させていく。

再登校の方法について

- A男は「教室に行ってしまうえば大丈夫」という気持ちがある。
- 保護者の協力を得ながら、期間を決めて専門機関ではなく、学校への登校を進めてみる。

(2) 支援計画に基づいた支援ができたか（見直し2）

ア 実践の概要

養護教諭から提案された不登校児童の具体的な支援方法を、生徒指導委員会において検討していく。そして、確認されたことを全職員で共通理解を図り、不登校児童への支援を行っていく。この支援の記録や月ごとのチェックシートにより振り返りを行い、不登校児童への支援計画の見直しや検討、十分な理解と連携が図れた支援体制がつけられているかを捉えていく。

イ 結果と考察

生徒指導委員会で検討された支援方法の確認は、以下の通りであった。

【具体的な支援方法の確認】

定期的な家庭訪問の実施について

- ・ A男が教室復帰するためにも、担任との信頼関係を深めていく必要がある。A男に会えても会えなくても定期的に訪問を続け、「いつでもA男のことを思っていること」を伝えていく。

旅行への参加について

- ・ A男の「旅行へ行きたい」という気持ちを大切にしていく。
- ・ 不安な気持ちを持っているので、「時間をかけて考えていいこと」を担任から伝えていく。
- ・ 参加への条件として「母親は一緒に行けないこと」「自分一人では行動できないこと」を担任、保護者、専門機関が同じように話していく。
- ・ 参加するかしないかはA男自身に決めさせ、バスが出発する直前まで待つ。
- ・ 旅行に参加できたら、登校を促してみる。

再登校の方法について

- ・ A男「教室に入ってしまうえば大丈夫」という気持ちがあるので、保健室から教室へのステップをとらずに、登校したら教室へと向かわせる。
- ・ 専門機関の通所ではなく、学校へ登校することについて専門機関と保護者が連絡を取り合って進める。

以下は、支援の記録をまとめたものである。

【取組の結果】

定期的な家庭訪問の実施について

- ・ 実際には、週に一度というわけにはいかないが、何回か家庭訪問をしていくことで、担任への抵抗感がなくなってきた。
- ・ 保護者も学校に電話連絡をしたり、学校に寄ってくれたりするので、学校と家庭との距離は離れることなく保たれている。

旅行への参加について

- ・ 旅行に行くまでの間、「やっぱり行かない」「やっぱり行きたい」という言葉が繰り返されたが、学校と保護者と専門機関で見守り、最後までA男自身に考えさせたことはよかった。
- ・ 結果として、当日は朝から参加できA男自身も「旅行は楽しかった、行ってよかった」と話していた。
- ・ 「旅行を機会に登校してほしい」という願いを持っていたが、A男自身にそこまでの気持ちはなかった。

再登校について

- ・ 専門機関ではなく、登校を進めたがA男自身から「学校へは行きたくない」という言葉が聞かれた。
- ・ 「教室に行けば大丈夫」という気持ちがあるので、保護者が学校へ無理に連れて来ようとしたが、暴言がひどく家の中を逃げ回ったため、今回の教室への登校は見送った。
- ・ A男自身から「保健室で何かしたい」という言葉が聞かれたので、気持ちを受け止め、担任と養護教諭で相談し「保健室に来られる日は保健室に登校してもいい」と伝えた。
- ・ 臨時に生徒指導委員会で話し合い、やはり教室に行くまでの不安を取り除くために保健室での活動を取り入れてみてもいいのではという確認がされた。

このように、一つひとつの対応について、記録を積み重ね、振り返っていくことにより、状

況に応じた支援の結果がはっきりし、次の計画へとつなげていくことができた。

また、話し合いを通して支援方法が具体的にになってきたことにより、不登校児童へどうかかわっていけばよいのかという職員の不安やとまどいが解消されてきた。このことは意識調査にも現れている（資料5）。「保健室で活動しているときに、声をかけ一緒に工作ができた。」「担任の先生が授業中なので一緒におしゃべりしてました。」こうした話題が職員室の中で起こってきている。こうしたことも、全職員の不登校児童とかわらうとする積極的な気持ちの現れと捉えられる。

不登校児童が教室復帰するまでには長いスパンで考えていくことが必要である。焦らずに児童の状況に応じた具体的な支援を、職員間で検討し確認し合って進めていくことの必要性を一人ひとりが感じてきている。これまで不登校児童の問題を一人で抱え込むことが多かった学級担任にとって、全職員で考えてかかわっていくという体制づくりにより、精神的な負担が解消されてきたことは、校内支援体制が充実してきたことのあらわれと考える。

資料5 意識調査結果の一部

生徒指導委員会の報告により	
・不登校児童の状況が十分理解できた。	90.9%
・不登校児童への対応の仕方が具体的に理解できた。	63.6%
・全職員が不登校児童の状況を考えながら対応できた。	72.7%
（具体的なこと）	
・不登校児童が登校した際、担任が授業中であっても、他の職員がスムーズに対応している。	
・不登校児童の保健室での活動に気を配り、意識的に声をかけている。活動を認め励ますことができた。	

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

「生活ファイル」を作成し、まとめた内容は、不登校児童の状況を理解し、支援計画を立てるために有効であった。

不登校児童に対する支援計画を、全職員で共通理解を図って進めたことにより、以前に比べて職員の不登校児童への支援の意識が高まり、校内支援体制が充実してきた。

2 今後の課題

不登校児童の状況を理解していても、かわりを持てなかった職員については、どのように対応していくことが有効であるか、情報交換を密にしていきたい。

連携の大切さを痛感したので、さらに連携がスムーズにいく工夫を考えていきたい。

*1 日本学校保健会 平成 14 年 9 月『保健室利用状況に関する調査報告書』（p16）の「調査時点において保健室登校をしている児童生徒がいる学校の割合」によると、平成 2 年では小学校 7.1 %・中学校 23.2 %であったが、平成 13 年には小学校 12.3 %・中学校 45.5%と増加の割合が大きくなっている。

参考文献

- ・(2001)『養護教諭が行う健康相談活動の進め方』財団法人 日本学校保健会
- ・群馬県総合教育センター編(2004)『S S Nスクーリングサポートネットワーク不登校問題課題解決支援資料』
- ・諸富 祥彦(2004)『シリーズ学校で使えるカウンセリング不登校とその親へのカウンセリング』ぎょうせい

